

つぶ たね はなし 4粒の種のお話

むかしむかし つぶ たね ひと ふくろ はい すうじつまえ のう ふ ふくろに
昔々、4粒の種が、一つの袋に入っていました。ほんの数日前、農夫は、袋に
はい たね だ 出 したばかりでした。そして、たった つぶ たね 種だけが
入っていた種をみんな出したばかりでした。そして、たった4粒の種だけが
のこ 残りました。いちばんおお たね 一番大きい種と、いちばんちい たね 一番小さい種と、
いちばんまる たね 一番丸い種と、いちばんたい たね 一番平らな種の
つぶ 4粒です。

たねたち いったい い どこへ 行ったんだろう? つぶ たねたち
「ほかの種達は、一体どこへ行ったんだろう?」4粒の種達は、いろいろと
おも 思いめぐらしていました。「どうしてほかの種達は、もどって来ないんだろう?」

のう ふ よ ひと わ 分かっていました。だけど たねたち これから さき
農夫が良い人であることはわかっていました。だけど種達は、これから先の
ことが わ 分からなくて、ふ あん 不安になってきました。「ぼくたち だ 出されるの
かな?」 たねたち 種達は、そんなことを ささやき合っていました。



よくじつ たねたち のう ふ こんなことを ゆうじん はな
その翌日のことです。種達は、農夫がこんなことを友人に話しているのを
みみ 耳にしました。「きょうは、この たね を まこうと おも 思っているんだ。」 そう 言いながら、
のう ふ ふくろ かる ふ み たね
農夫は袋を軽く振って見せました。

ふくろ なか おち たねたち み よ あ ね せいちよう
袋の中では、思わず種達が身を寄せ合いました。「根がのびのびと成長できる
ように、間をあけて、地中にうめるんだよ。」と、農夫は言いました。

たねたち ことば ちちゅう ことば し
種達は、「まく」という言葉も、「地中」という言葉も知りません。じきに
はなればなれになると きき しんぱい 心配になってきました。今までに いちど はなれた
ことが ないのです。 たねたち 種達は、おそろしくてブルブルふるえました。

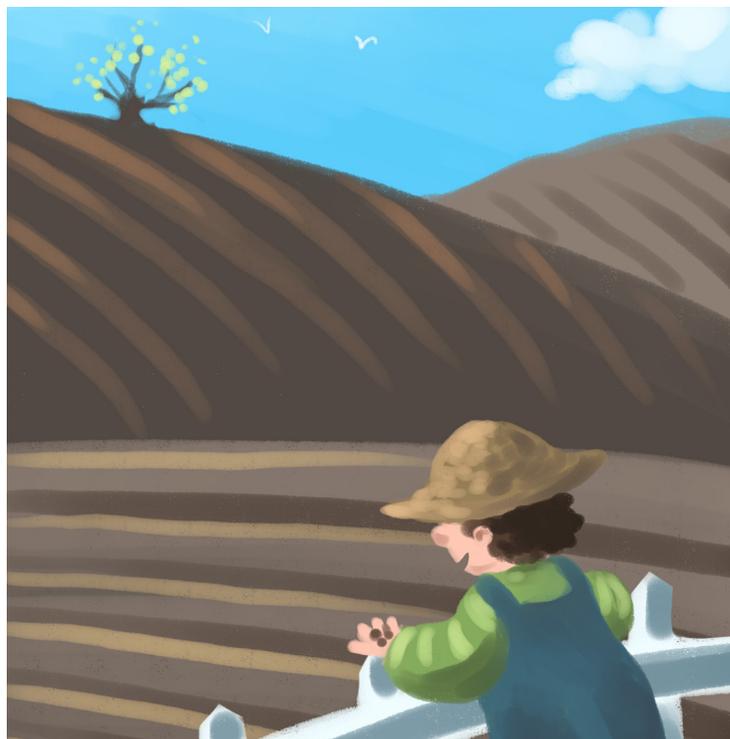


その日の午後、農夫は袋から種を出して、一つ、また一つと、順番に見つめました。

「少しの間、土の中にうもれることになるよ。こわいかもしれないけど、勇気を出してしんぼうしていれば、じきに、新しい命に生まれ変わるからね。今では想像もできないような、美しい姿になるんだ。」農夫は、思いやりをこめて言いました。

それを聞いて、種達はほっとしました。その翌日、農夫は種の入った袋を持って、畑に出て行きました。

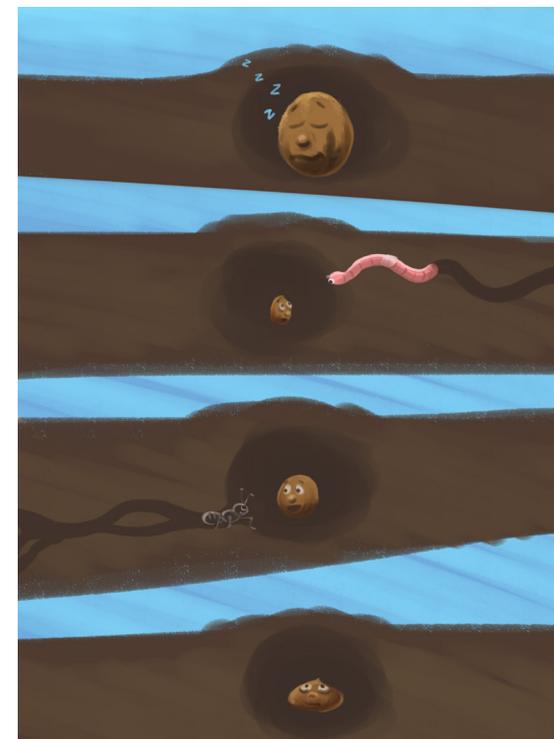
「みんな、勇気を出そうよ。」最初に袋から出された一番大きな種が、ほかの種達に呼びかけました。一番大きな種は、地面に開けられた穴の中にそっと置かれました。農夫は目を細めて種を見ると、土をかけました。



次に、一番小さな種がまかれました。その次に一番丸い種、そして最後に一番平らな種がまかれました。

一粒一粒と、種達はみんな、ていねいに地面の中にまかれました。

種達は一粒ずつ別々にまかれたので、最初は心細く感じましたが、じきに、新しい友達がいることに気づきました。ありが、一粒のそばを通りがかりました。ミミズが、他の一粒のそばを通りがかりました。地中の生き物たちが、「こんにちわ！」とあいさつをして通り過ぎていくのです。種達は、そんなにさびしくなくなりました。





なんにち す 何日も 過ぎました。そして、なんしゅうかん す 何週間も 過ぎました。こころぼそ かん 心細く 感じたり、ま どの お 待ち遠しく なったり すると、たねたち の う ぶ こと ぼ ぶ お ち だ 種達は 農夫の 言葉を 思い出しました。「勇気を出さないと。あたらしいのち う か 新たな命に 生まれ変わるんだから。」そう 自分に 言い聞かせました。

さて、ごく ありふれた ある日 の ことです。いちばんちい たらね し ぶん 一番小さな種は、自分が もう ちちゅう 地中に いないことに 気が付きました。夜の間に、ぐんぐん、ぐんぐんと 成長して、いま 明では、あか あおぞら 明るい 青空を ながめているのです。

「とうとう、その日 が 来たぞ！ あたら ใหมのち う か 新たな命に 生まれ変わったんだ！」 ちい 小さな

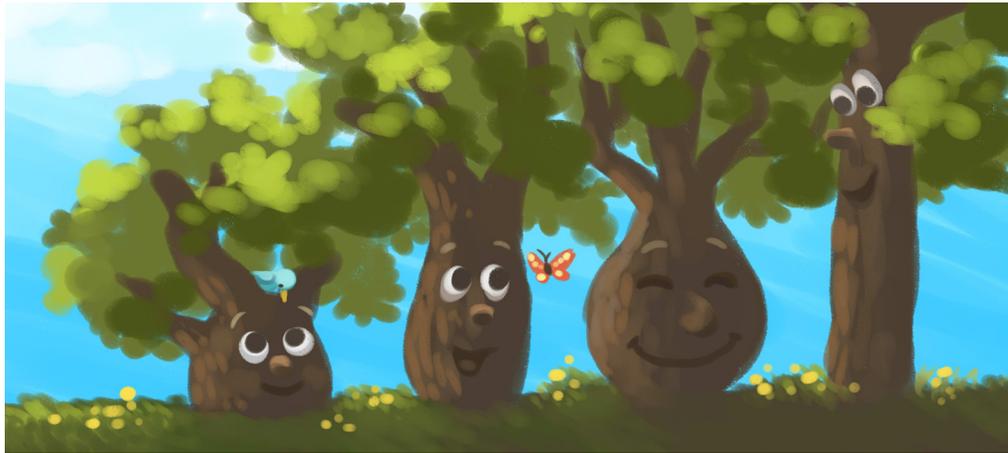


め おお こえ い 芽は、大きな 声で 言いました。あた みまわ と とも 辺りを見回すと、友だちの 一番大きな種と 一番 まる たね いちばんたい たね め だ 丸い種と 一番平らな種も、芽を出していました。みんな、なが あいだ 長い間 はなればなれだった けど、ついに また いっしょに なることができ、およろこ ほんとう しあわ 大喜びです。本当に 幸せでした。

いっしょに おしゃべりしたり、わら 笑ったり、かぜ 風に なびいたり しているうちに、まいにち 毎日 は 飛ぶように 過ぎて行きました。

わか ぎ たち 若木達は、し ぶん たち 自分達の 葉や 枝が ひ えだ ひ 日ごとに 成長し、せいちょう てん き きせつ 天気や 季節ごとに 変わって いくのを、きょうたん め 驚嘆の 目で ながめていました。



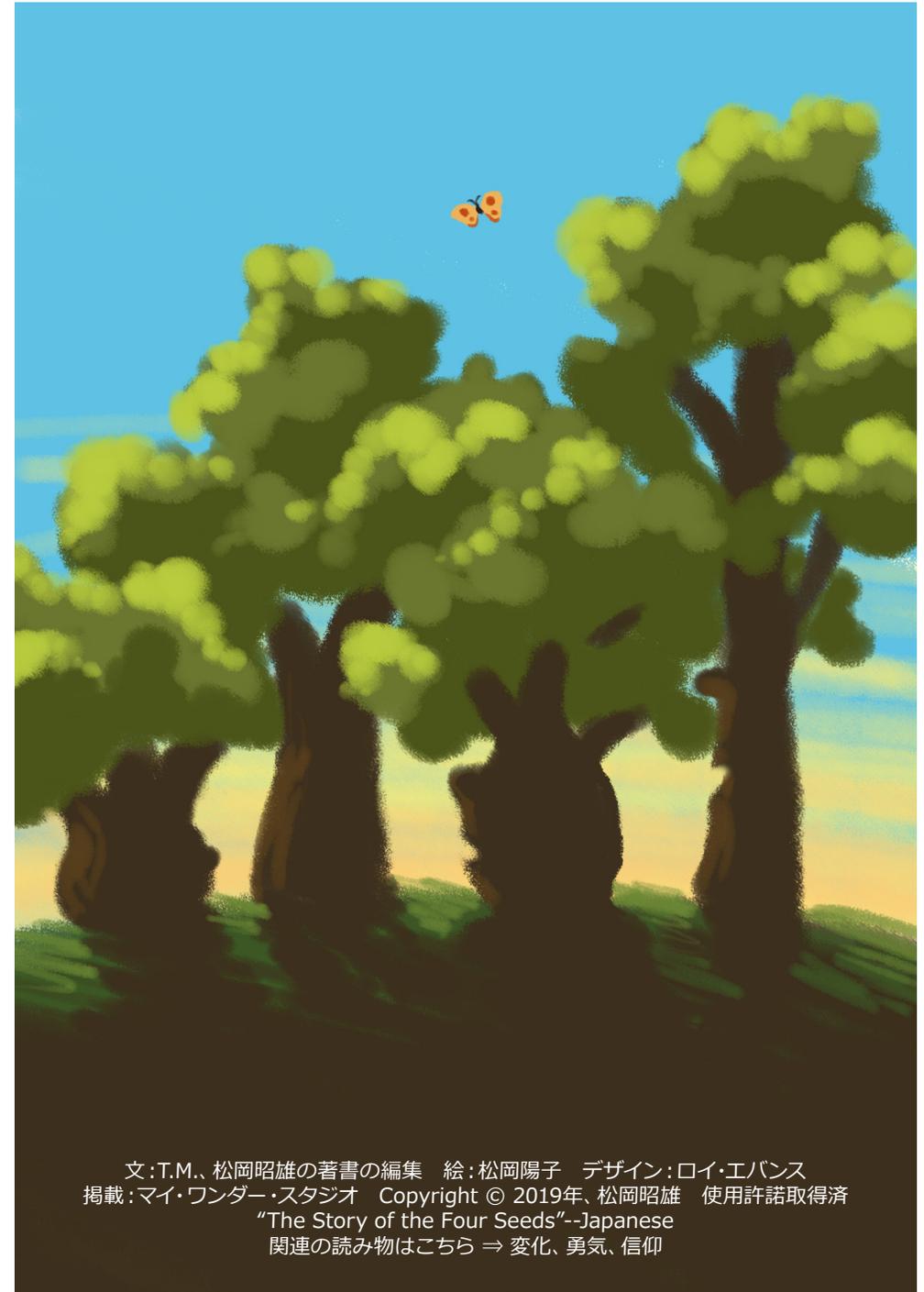


何年^{なんねん}も たつと、みんな、大きくて 立派^{りっぱ}な 木^きになりました。そして、たくさんの
若木^{わかぎ}達^{たち}に 木か^こげを 落^おとすようになると、何年^{なんねん}も 昔^{むかし}、自分^{じぶん}達^{たち}が 地中^{ちちゆう}に まかれる
こと^{こと}を 思^{おも}ってブルブル ふるえていた 日^ひのこと^{こと}を 思^{おも}い出^だしました。

「勇気^{ゆうき}を出^だして 農夫^{のうふ}の 言葉^{ことば}を 信^{しん}じたこと^{こと}を、うれしく 思^{おも}うよ。」一番^{いちばん}平^{たい}らな種^{たね}が、
他^{ほか}の 種^{たね}たち^{たち}に 言^いいました。

ほか^{ほか}の 種^{たね}達^{たち}も、たくさん^{たくさん}の 仲間^{なか}達^{たち}が 勇気^{ゆうき}を出^だしてくれると いいね、と 願^{ねが}うので
した。

お
終^おわり



文:T.M.、松岡昭雄の著書の編集 絵:松岡陽子 デザイン:ロイ・エバンス
掲載:マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2019年、松岡昭雄 使用許諾取得済
“The Story of the Four Seeds”--Japanese
関連の読み物はこちら ⇒ 変化、勇気、信仰

さいご 最後に

イエス様は、こう 言^いわれました。「一粒^{ひとつぶ}の 麦^{むぎ}が 地^ちに 落^おちて 死^しななければ、それは
ただ 一粒^{ひとつぶ}の ままである。しかし、もし 死^しんだなら、豊^{ゆた}かに 実^みを 結^{むす}ぶように
なる。」(口語訳聖書、ヨハネによる 福音書 12:24)

わたし達^{たち}が 経験^{けいけん}すること^{こと}の 中^{なか}には、不安^{ふあん}に 感^{かん}じたり、心細^{こころほそ}く 感^{かん}じたりすること^{こと}も
ありますが、そのような 時^{とき}には、しんぼう強^{つよ}くなり、神様^{かみさま}の 愛^{あい}を 信^{しん}じるように、
と 神様^{かみさま}は 言^いっておられます。悲^{かな}しく 困^{こん}難^{なん}な 時^{とき}でさえ、再^{ふた}び 幸^{しあわ}せの ありがたさを
かみしめられる 時^{とき}を もたらしてくれるようになるのですから。